

機械線蟲

-Nanotechnology-

山牧田 湧進



【まえがき】

※【ご注意ください】

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

依頼や仕事ばかりでなく、趣味としても研究をすることがあるG博士。

そんなG博士が趣味で機械線蟲を作り上げた。

趣味とはいえ、最先端の技術を惜しみなく注入した多機能な自律型半軟体小型ロボットである。

やたらと細長い、ミミズの親分のような形のこのロボットで、G博士はいったいどんなことをするつもりなのか。

G博士は完成した機械線蟲をこっそりと群星だけに見せ、蔵木には隠したままで突発ドッキリ実験を敢行した。

性的な実験を拘束された状態で行われる『人体実験牢』で、重厚な拘束椅子に一人括り付けられた蔵木の豪勢な裸体に突然、機械線蟲が落とされる。

【主な登場人物】

・蔵木 宏彰（くらき ひろあき）

物語上の一人称「私」。複雑な生い立ちを持つ筋力と体力に優れた巨漢。

G博士との出会いは『精液分泌過剰促進剤』の被験者として抜擢されたことが始まり。群星とは保護兼世話役としての出会いが最初である。群星に課された大量精子提供問題の解決に蔵木がG博士へ協力を要請したことで三人が集結した。他者のDNAを取り込み易い性質があるらしく、能力強化がされた（と思われる）部分も多々存在する。意図的に強化された身体能力はDNA強化改変型後天性リアルスーパーマンの第一号とも呼ばれる。一方で、ドーピングをしなくても異様に性的能力が強いことが徐々に明らかになり、性的な点では先天性リアルスーパーマンと呼ばれることがある。大人のゆとりと色気と良い意味での隙きも持ち合わせていて、G博士の最もお気に入り。意外に欲深い。

・群星 光矢（むるぶし こうし）

物語上の一人称「僕」。人類に理解のできない記録の出し方をして生命を狙われる嵌めになった元超トップアスリート。蔵木に対比して先天性リアルスーパーマンの第一号とも言われる。高バランスの身体能力を持ち、特に強靱な筋力を持ち合わせつつの俊敏性の絶対的高さが蔵木に対するアドバンテージになる。精巣ドーピングの後遺症でまだ肥大化したままの睾丸が方で衝撃を生み、それが事態好転のきっかけにもなったりするラッキーボーイ。本来はゲイではなかったが、今では蔵木にべったり。馴れるに連れて未っ子的なキャラが目立つようにもなったが、そのお気楽さが達観から来ていることも。

・G博士（Dr. G）

男性、および、男性の性機能に強い関心を持ち、極秘の研究を続ける科学

技術者。その分野では先端のさらに先を行っており、しかし、その研究成果はそのままでは公開されず、時間を置いてから公開できる部分だけを厳選して抜粋もしくは未公開のまま製品開発に移行されるため、G博士本人が発表のための論文を書くことは無い。学者界でも名を知られない人物だが、蔵木とは以前から縁があった。G博士本人はそれに全く気付いていない素振りを長年してきたが、本心か演技かは不明。

これまでのG博士の研究精果は『合法的に人格を破壊する方法』『精液分泌過剰促進剤』『超人幽閉！』『精巣ドーピング』『DNA Hacker』『地下精液闘技場』『アングラザーメンコロッセオ』『射精妨害拷問』『男性用妊娠補助薬の副作用』に記載されている。



【目次】

目次

表紙	1
まえがき	2
あらすじ	3
主な登場人物	4
第1章 趣味で作り上げた	8
第2章 機械線蟲で	22
第3章 尿道侵略して	24
第4章 前立腺を内側から	26
第5章 責め立ててる!?	28
奥付	30

第1章

趣味で作上げた

「ほっほ♪」

G博士は独り、楽しげな声を上げた。

G博士の仕事場には側近の助手であり、貴重な検体の生産者であり、性を含めた身体能力のスーパーマンであり、人体実験の被験者である蔵木と群星が居るのだが、G博士は仕事の時間の全てを二人とともに過ごしているわけではない。

それは前回、『男性用妊娠補助薬』などという物を二人が知らないうちにいつの間にか作り上げていたことから分かることであろう。

G博士はたまにこうして、他に誰も居ないG博士専用の個室に籠もることがある。

そして、よく仕事をさぼ（うわっなにをdp……うう）、ま、稀に仕事としてではなく、個人的な趣味として研究をすることがある。

G博士は密かに作り上げた成果物を手のひらから袖の中へと潜ませて、そっと

個室の扉を開いてみた。

G博士にとってはパブリックスペースである仕事場では、群星が何やらデータの整理をしており、しかし、蔵木の姿は見当たらなかった。

G博士は無言のままそっと群星を手招きするポーズを取ってみた。

何を察したのか、PCに向かっていたはずの群星はふと顔を上げて、ちょうどG博士の手招きを視界の中に収めていた。

群星が静かにG博士の元へと近付いて行くと、

「蔵木さんは？」

まずは小声で、G博士は群星に蔵木の所在を確認しようとした。

「多分、トイレに行っているんじゃないかと思えますよ」

G博士は軽くニヤリと微笑んだ。

「コレ、見てみてよ」

言われたとおりに覗き込んだ群星に、G博士は左手の手のひらを広げて見せる。

G博士の手のひらには、ミミズのような線蟲がうにゅうにゅうとうねっており、手のひらには収まりきららずにG博士の袖の中にまで繋がって伸びている。

群星は一瞬にして15cmほど顔を引いた。

「な、なんですかコレ？ 気色悪い」

驚きながらも、声を抑えて聞いてくる群星に、G博士は『反応は上々』とばかりに満面の笑みを浮かべる。

「何、って、如何にもどこかに潜り込んで行きそうなスタイルと、どこかに潜り込んで行ったような動きをしておるじゃろ？」

よく見ると、ミミズよりも光沢があり、見る角度が少しズレるだけで色味が変わって見える玉虫色、マジョーラカラーとなっており、よりキモい線蟲感を醸し出している。

しばしG博士が飼っているペットを気味悪そうに眺めていた群星だったが、だいたいいつも群星は機転が良く利く。

席を外している蔵木を待たずに、自分にだけ見せてきたその意味に、群星はさほどの時間を要せずに辿り着けるのだった。

微妙なアヒル口というか、少し口をへの字にして、群星はG博士の手のひらから顔へと視線を持ち上げて行った。

「ひょっとして、これを蔵木さんに？」

「どう？」

嬉々として聞き返してくるG博士に、『なるほど、これをねえ』と目を丸くして感嘆していた群星だったが、群星が口を開いて回答しようとしたところで蔵木が部屋に戻って来てしまった。

慌てて個室に引っ込むG博士。

群星は至って平然と振り返り、さもいつものことのように普通に蔵木に問い掛けた。

「蔵木さん、Dr・Gがちょっと実験してみたいそうなんです、蔵木さん被験できますか？」

「え、今からですか？」

「ええ」

「まあ、大丈夫、ですけど」

「それじゃあ、早速、例の実験室に向かいましょうか。Dr・Gは準備ができ次第追って来られますので、僕は先に行ってましょう」

「え？ あ、はあ。随分と急ぐんですね。何かあったんですか？」

群星はPCなど携帯する持ち物を整理しながら、

「特に問題があるわけではないのですが、鮮度が大事なテストをしたいらしくて突発の抜き打ちになってしまいました。済みません、突然のことです」

「あ、いえいえ。私達は毎日が被験しているようなものですから、それは構わないですし、仕方ないと思っておりますが……。今日は私だけ、って感じですかね？」

「ええ、必要に応じて僕も後日被験することになるのかもしれませんが、とりあえず蔵木さんをお願いしたい、ということですね」

「そうですね。ま、それもいつものことですね。それじゃあ、とりあえず私はこの身を移動するだけで良いですかね」

「はい。お願いします」

群星もちょうど荷物がまとまったみたいだ。

例の実験室、「HEP - Human Experimentation Prison」(訳:「人体実験牢」)はかつてまだ部外者だった頃の蔵木が、目隠しや耳栓などをされたまま連れて来られて、実験用の特製拘束椅子に首まで固定された状態でようやくその殺風景な部屋の内側だけを見ることができた門外不出の施設なのだが、G博士の側近の助

手となって『射精妨害拷問』の被験をするときに初めてその所在を知り、それ以降、蔵木一人でも来ることができるようになった場所だ。

とはいえ、

「私、あの部屋はまだちょっと苦手なんですよね」

蔵木の足取りは重かった。

元より体力に優れ、精力にも非常に優れていた蔵木は、G博士に変に気に入られた結果、劇薬『精液分泌過剰促進剤』を過剰投与されてしまうという重大な過失の被害に会い、急速な精液過剰分泌による内臓膨張破裂と生成エネルギー枯渇による餓死の危険に直面しながら、唯一自由にされた右手だけを頼りに総計約4リットルもの精液を射精しなければならぬ超危険な状況にさらされてしまったのだ。

下手すると、射精する量よりも分泌される精液の量が上回ってしまう状況の中、

必死に己を扱いた蔵木は天井に壁にぶち撒けてぶち撒けて、なんとか概ね射精しきったところでダウンした。

また、『射精妨害拷問』の際にも、蔵木のエロチシズムに魅惑されたG博士が必要以上に蔵木を追い詰めてしまい、結果として蔵木に失禁とまたもや気絶をさせてしまっている。

そんな激しく厳しい経験ばかりが詰まっている、あのオフホワイトと銀色だけの殺風景で不自由な世界にはなるべく足を踏み入れたくない、という気持ちは非常に頷けるものだ。

ただ、それだけでは済まさないところが、蔵木が性的にもリアルスーパーマンであると言わしめるところで、

「どういふふうに苦手なんですか？」

と、聞いた群星に対して、

「あの部屋に向かおうとするだけで、つい、ね、勃起しそうになっちゃうんです」
 トラウマでEDになるどころか、あれほどの目に遭っても、いやむしろあれほどの目に遭ったからこそなのか、ともかく、勃起しそうになるとか強者もいいところである。

群星と蔵木の二人で先に『人体実験牢』の手前の部屋まで来たところで、

「僕は監視室の方で実験の準備を進めますので、蔵木さんは『実験室』の方で待機しててください」

「実験『牢』、ね」

群星の物言いを無意味に訂正しながら、蔵木はこの部屋の頑丈な扉を開けて、また一人きりで、自ら『牢』の中に身を投じて行った。

オカズになるような物は勿論、性的な興奮を励起させるような物など何一つ無いひたすら殺風景なだけの気が狂いそうな部屋。

それなのに、ここに来ると蔵木はどうしても性的興奮を抑えられなくなる。

後にも先にも、もう二度と、そして他の誰にも出来ないであろう、約4リットルもの大量射精。

そして、どんなに絶頂し、射精しようとしても、一滴の精液も漏らさせてもらえずにひたすら性感刺激を強制的に打ち込まれ続けた射精妨害拷問。

蔵木の、トラウマレベルを超えるここでの性体験はこれ以上無いほどに両極端だ。

そして、ここまで極端な性体験は、ここ以外の場所ではそうそう起きるものではない。

(※作者訂正。実際には、蔵木はここ以外の場所でもなかなかスパイシーな性体験に何度か遭遇しています。)

蔵木はただただ一様な天井と壁、怪しいハーフミラー、と周囲をぐるりと見回し、それから、補強に次ぐ補強でやたらと無骨になっている拘束椅子に目をやった。

「あれもこれも、何もかもが忌々しいのに、どうしてもここに来ると身体が疼いてしまう」

蔵木の強烈で鮮明な記憶は、今はまだ空席なはずの拘束椅子にもう一人の蔵木を括り付け、蔵木の目の前で、括り付けられた蔵木は悶絶しながら部屋中に精液を撒き散らした。

蔵木は勃起してしまった。

そんな自分に気が付いた蔵木は、自分を恥じるように、誤魔化すかのように首をふるふると小刻みに振って記憶を散らした。

「でも、流石に気絶はもう、勘弁してもらいたいところだ」
最後に残ったキツイ記憶が、蔵木に本音を呟かせた。

とはいえ、この場所はそもそもそういう性的な人体実験をするために作られた場所であるため、ここで幾ら勃起しようが何も恥じることなく不要である。

実際、蔵木はこれから被験に向けて全裸になる必要があるし、勃起は勿論のこと、射精だってばっちり観察されるし、20台近くに及ぶカメラに映像も音声も克明に記録される。

ただ、実験を始める前から勃起していたら、場合によってはちょっと恥ずかしい思いをするかもしれないな、という程度のものだ。

蔵木は軽く自分を笑って、衣服を脱ぎ出した。

毎日のように他人に（主に群星に）勃起した性器を見られている蔵木だが、そんな毎日を繰り返し重ねていてもなお、まだ勃起を晒すときにはちよっとした恥じらいが残っていて、

「慣れきらないものもあるもんだな」



と、
妙に初々しい気分にもなる。



機械線蟲で

第2章



(こちらは体験版です)



尿道侵略して

第3章



(こちらは体験版です)



第4章

前立腺を内側から



(こちらは体験版です)



責め立てる!?

第5章



(こちらは体験版です)





機械線蟲

-Nanotechnology-

OpusNo. Novel-067
ReleaseDate 2020-07-31
CopyRight © 山牧田 湧進
& Author (Yamakida Yuushin)
Circle Gradual Improvement
URL gi.dodoit.info

個人で楽しんでいただく作品です。
個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、
共有、アップロード等はしないでください。
(こちらは体験版です)